第5部　大垣市における地域資源活用型体験交流プログラムの現状と展望

倉地　幸子*　藤墳　敬子*　岩田　節子*

目次

はじめに
第1章　調査自治体の特長
　1-1　大垣市上石津地区の特徴
　1-2　上石津の自然文化と風習
　1-3　加速する高齢化と人口減少
　1-4　就業構造
　1-5　合併後の住民自治制度
第2章　地域資源を活用した体験交流事業の現状と課題
　2-1　上石津町地域活動の現状
第3章　子どもの学び場としての農山村体験交流事業の可能性
　3-1　可能性
　3-2　優れている点
　3-3　課題の評価
　3-4　経済効果
　3-5　社会効果
　3-6　地域の他産業や人々の意識
　3-7　実施体制の状況
　3-8　実施に向けた提言
おわりに

はじめに

合併による枠組みの変化が地域の中に徐々に目に見える形で現実のものとなりつつある。

これまで上石津地区は長い伝統と歴史の中で地区特有の地域づくりが営まれてきた。少子高齢化がますます進み、合併と言う変化によって地域に根ざしてきた人々のつながりや、育まれてきた地域資源の保全を今後どのようにして継承していくかは上石津地区の人々にとって地域の存亡に関わる大きな問題である。

危機感を持って地域の存続を願う人々の地域づくりの現状を知ることで、豊富な地域資源の生かし方、都市と農村の交流事業の可能性と課題を探る。

近年、修学・教育旅行は、従来の「観る」旅行から「体験する」旅行へと変わりつつある。学校側からもそのニーズに応じた受け入れ先が求められている。

現場を知らない、地域を知らない子どもたちを実体験によって社会との結びつきを得させる試みとして、特に体を使い自然に触れる農林作業体験が各地で行われている。後継者を育てる意味でも必要である。県内でも飛騨地域は自然環境を生かしてこの事業を展開している。しかし、名古屋都市圏から交流人口を呼び寄せることの容易と思われる大垣市など西濃地域では、まだ見当らないといってもよい。そこで、以下では、大垣市上石津地区にその可能性を探りたい。

第1章　調査自治体の特長

1-1　大垣市上石津地区の特徴

大垣市の面積は206.52平方キロメートル。合併により面積は前の2倍となった。新大垣市は、東に墨俣地区、南西に上石津地区が広がる。

岐阜県内三大河川である揖斐川、長良川が流れ、周りには多くの河川が網目状に流れる水郷地帯で、上石津地区を除くほぼ全域が海抜3～4メートルの低地である。

西に鈴鹿山系、東に養老山系、北に南宮山塊と標高800メートル前後の山々に囲まれ、中央を縫うように牧田川が南北に貫流し、その周辺に集落が開けた盆地の町である。

2004年の7月の平均気温は27.2度と30度以下であるが、降雨量は8月が最も多く400ミリを超すが降雨日数は平均3日である。最大の特徴は総面積123.38平方キロの84.2%が山林であること。宅地はわずか1.92%。農用地も5.06%である。

1-2　上石津の自然文化と風習

上石津地区は豊かな自然の恵みを受け、長い時をかけて創り上げられてきた文化と歴史のある地域である。

面積の8割を占める森林に、薪の供給源である林があり、近くに田やため池や畦があって、

*地域経済研究所奨励研究員

人間の農作業と一緒に生物が住める環境が用意されている。

この森林は人工林が少なく、広葉樹に恵まれた里山として町の宝であり、外からも注目されている。

近年、林業・農業従事者が減る中で里山の荒廃が心配されているが、林業と農業が放棄されるに伴う生物の消滅や洪水などの被害も心配され、美しい上石津の景観が消えてしまうことへの不安が広がっている。そこで、地域をあげて里山学習や生垣作り、炭焼きや花作り活動など木材の再利用の取り組みなど里山の再生と保全を実現するための様々な活動が行われている。

上石津全体を見ると、歴史資料館や江口夜詩の記念館・日本昭和音楽村や緑の村公園、多良峡森林公園・時山バンガローなど自然環境を生かした魅力ある施設が揃っている。

一之瀬地区には国の重要文化財である「桑原家住宅」や天喜寺、長彦神社などもあり、全体的に見るとコンパクトな地形の中にいろいろな要素がある地域であることがわかる。

1－3　加速する高齢化と人口減少

大垣市は岐阜県西濃地方に位置する、岐阜市につぐ県下２番目に人口の多い都市である。

2006年３月27日に安八郡墨俣町、養老郡上石津町を編入。２町とも大垣市には接することなく、全国では唯一の二重飛び地合併の地である。

旧上石津町は三重県に隣接する関係で古くから藤原町とも人口交流があり、この企画にあたって将来の交流人口増加の期待を担う土地柄でもある。

大垣市の人口は166,960人(2008年３月31日)、岐阜県内21市中第２位。世帯数は62,020世帯、一世帯当たりの平均人員は３人。核家族化と少子化が進み、年々縮小傾向にある。外国人登録人口は、2002年より毎年増加傾向にあり、全人口の4.2%にあたる約7,000人。

上石津地区の人口は6,461人（2008年３月31日)。２年前（2006年12月末）の6,660人から199人減っている。年次人口動態の推移では毎年50人前後の減が続いているが、その半数近くは死亡による自然減である。

今後、核家族化と高齢化が予測される。大垣市の合計特特殊出生率は1.39。国は1.25。岐阜県は1.28（2005年度）となっている。旧上石津町では毎年、40人前後の出生があったが、2004年には2001年より続いた出生数の減少に歯止めがかかり10名も多い45名の出生があった。

減り続ける児童数も地域の存続には深刻である。1985年には1,036人いた小中学生は2005年、556人と20年間で半減した。

旧３市町の高齢化率の推移をみると、2002年以降は３市町とも高齢化率が高くなっている。

特に旧上石津町、旧墨俣町では高い高齢化率を示しており、2007年には旧上石津町で29.3%、旧墨俣町で25.3%。2014年の高齢者人口予想は39,794人、高齢化率は全体で24.7%と約４人に１人は高齢者となる。

1－4　就業構造

大垣市は、豊富な地下水と東西交通の要衝から、化学、機械など製造業を中心に県内有数の産業都市としての発展してきた。

市内在住者のうち市内で就労している就労者率65.9%と県平均の61.7%を上回っている。しかし、企業活動のグローバル化に伴い、古くからこの地で創業していた繊維工場の閉鎖が相次ぐなど、産業構造の変化が起きている。

一方、ITの発展に伴う製造業の技術革新により、岐阜県のIT研究教育拠点ソフトピアジャパンを中心に、IT関連産業が大垣市の次世代主要産業として位置づけられてきた。2000年の産業別就業人口の割合は、第一次産業が５%、第二次産業が47%、第三次産業が48%であり、第一次・二次ともに減少が続いている。特に、農業は12年前に比べて2000年には６割も減少して、1980年当時の30%になってしまった。農家も激減しており、増加しているのはサービス業だけである。

1－5　合併後の住民自治制度

上石津地区の人口動態の変化を見ると、地域を維持していく原動力となる若者の定着が必須

となる。

上石津地区では、大垣市との合併問題が早くから問題にされてきたことは、それだけ地域の将来への危機感があったといえる。上石津町の地域づくりの取り組みには、そうした危機感から、新しい枠組みに地域の特色までもが呑まれてしまうことのないようにという人々の願いが込められていた。

西濃1市9町から成る「西濃合併法定協議会」の紆余曲折を経て、ついに2006年3月27日に養老郡上石津町は安八郡墨俣町とともに大垣市に編入合併し、大垣市の「上石津町地域自治区」となった。西濃圏域1市2町合併協議会において、住民が地域のまちづくりを自主的に考えるため、上石津地区と墨俣地区に「地域自治組織」を設置することが決められ、上石津地区には上石津地域協議会が設置されている。現在、同協議会を構成するのは旧来からの5自治会である。

上石津広報会(現在は自治会と言う)は長年、住民参加を原則とした独自の個性的な地域づくりを行ってきた。

合併後3年間は、旧地域の自治会組織を維持するが、名称は上石津広報会から大垣市上石津自治会へ変更した。今年が期限の3年目にあたり、来年からは大垣市にならって自治会長の報酬もに大垣市と同じになる。

大垣市と同じ仕組みの自治会組織になることによって、大きな枠組みの中に薄められるかもしれない地域の特色を残したいと、各地区で独自の組織が立ち上がっている。

長年続いた地元に根を張る自治会組織が、大垣市の一つの組織に入ることで、上石津地区の人々、特に自治会関係者には心理的な変化があるように感じられた。不安を打ち消すかのように未来に地域を残そうと言う情熱が活動を支えている。

表1　自治会の構成（2008年3月末）

	多良	一之瀬	牧田	時	合計
世帯数	613	166	576	407	1,762
自治会数	16	3	11	10	40

地域協議会は、合併する「地域自治区」の住民の声を、市政に反映するために設置された公の機関である。公募による委員のほか、「公共的団体などの代表者」・「学識経験者」の15人で構成される。

委員の任期は2006年6月1日から4年間。これまでに4回開催されている。地域協議会は大垣市長の諮問機関のため、召集のあるときに限り開催される。

第2章　地域資源を活用した体験交流事業の現状と課題

2－1　上石津町地域活動の現状

1）多良地区「多良地区故郷おこし実行委員会」

現在、同地区では各種団体代表と連合自治会代表によって故郷おこし事業が運営実施されている。同事業の企画立案は、多良公民館長・社会教育推進会代表・社会体育推進会代表らによって行われている。

主な活動内容は、盆踊り大会や町民運動会、球技大会、歩け歩け大会などである。

多良峡の自然を生かした地域作りに力を入れ、近年は、夏に町外から多良峡へ、家族連れや若者が車で訪れる人気のスポットになってきている。それに伴い、課題も指摘されるようになってきた。

第1は、合併後の自治会組織をどう維持していくかである。交流事業の中核的担い手である自治会長の仕事は、合併しても変わらず多い。大垣市と一緒になることで、地域に必要な仕事もして従来の業務が認められ、かつ報酬が認められるか不安視されている。

第2は、川原にゴミを置いていくなど、マナーの悪さが目立ってきた点である。規制が必要か。できるだけ規制を低くし、誰でも自由に来てもらえるようにしたいが、いつも管理監督ができないので、観光資源として有効に利用することも大変である。

大垣市の中の多良地区と言うことで、今後は、市内の子どもたちが喜んできてくれるような、遊びを主とした体験型市内交流企画を用意して

いきたい。

2）一之瀬地区「一之瀬地域振興会」

同会は、合併しても年間を通して地域の人々の絆を強くし、活力のある地域の中で、地域の発展を願う人材を育てたいという思いから、2005年７月発足。企画振興部・農林振興部・環境保全部・生涯学習部・町おこし事業部の５つの事業部を持ち、住民の自主的な参加によって行われている。

活動内容は、地域の特色を生かしたさくら祭り、ホタル祭り、コスモス祭りなどの四季を通じたイベントや運動会、歩け歩け大会などである。他にも地域の美化活動や花作りにも支援を行っている。合併後、町おこし事業部では大垣市内の子どもたちを一之瀬に気楽にこれるようなさつまいも掘りや映画会などの楽しい行事も全市にPRして行っている。

同会を構成する「川東花づくり実行委員会」は、2001年に結成され、「通学道路をあじさいロードに」「一坪花壇の推進」「遊休田の花畑」などの目標を掲げて活動が始まった。年間を通じて花壇の草取り、花植え、整地などの作業を子どもたちも参加し、共同で進め、季節の花々を育てている。

同じく「ほたるの里づくり実行委員会」は自然環境の見直しから学習会、河川掃除、カワニナ調査も行い、一之瀬がホタルの里となるような環境保全活動へと発展させている。

さらに「リアリティ花の里」は、毎週日曜日の朝６時から、一之瀬ポケットパークで生産した花や季節の野菜や特産品の朝市を開き、収益を上げ活況を呈している。

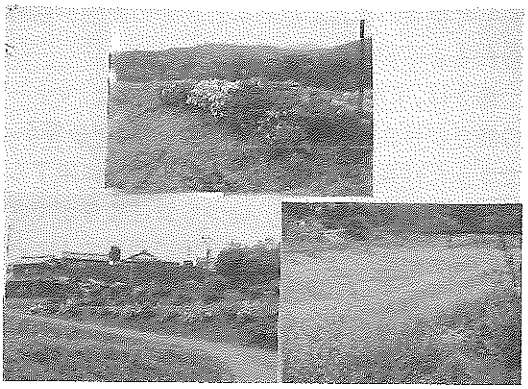
本格的な農山村交流事業への関心は、まだ回りの動きを見てからという感じである。現在は、大垣市に近いこともあって合併したことによる不安は住民にはあまりなさそうである。平常どおりの生活が続くだろう。若い家族は大垣市内や市外に勤めており、移動の不便さはない。農山村交流事業を積極的に進めるにあたってはまだ地域の人々の合意形成ができていないが、一之瀬の人々の団結力を以ってすれば可能性が期待できる。

3）牧田地区「牧田地区ふるさとづくり実行委員会」（後のあそび塾）

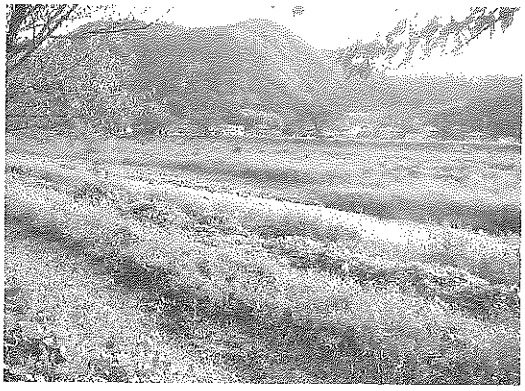
同地区では、次の世代が住みたくなるような地域づくりをするため2003年12月「牧田まちづくりリーダー会議」を開催、今後のふるさとづくりの場として「牧田まちづくり会議」を町民に呼びかけ、ワークショップにより「夢マップ」を作り、2004年４月「牧田地区ふるさとづくり実行委員会」を設立した。

同委員会は、菜の花グループ／花グループ／ホタルグループ／歴史研究グループ／看板研究グループ／子育てグループ　合計７グループからなる。子育てグループが後の「牧田あそび塾」として開校。自治会長は上記のどれかのグループに所属している。

活動内容としては、毎月１回、会議を開催。



川東地区の花づくり



牧田川の堤防のコスモス

主に夏休みにボランティアの手を駆りながら留守宅の児童の居場所作りを行っている。年々参加児童が増えているので「なでしこグループ」など他のボランティア団体が食事の世話をしている。地域の大人の参加により地域のつながりが子どもから大人へと広がっている。

課題としては、参加児童が増えており人手不足が心配されている。夏休みは、参加児童の親の参加を促すことに力を入れたい。農山村交流事業は良い企画であると思うが、PRできる地区の素材の精選が必要。宿泊まで受け入れるとなると意見調整が必要だ。上石津全体として交流事業の検討会が出来ると良い。

4）時地区「時まちづくり活動推進実行委員会」から「時　夢工房」へ

1992年4月「時ふるさと実行委員会」設立後、高齢化と人口減少の地域の変貌に対応するため2003年7月に「時まちづくり活動推進実行委員会」を設立、まちづくり計画を策定。合併による地域の衰退から地域を守り、ふるさとの良さを子供たちに伝え、引き継いでもらいたいと地域や学校と協力し合い活発な自主的活動を展開している。地域の児童の親たちが中心となっている。

活動内容としては、百聞沖桜並木の整備、烏帽子岳ハイキング道の整備、日本昭和村音楽堂入口花壇整備、かなじん紙芝居劇場の開催など地元の個性を大切にし、子どもたちを交えた地域のパワーでまちづくりを行っている。2005年には岐阜県の「協働型県民活動促進事業」の支援により「ふるさと学校」を開く。時地区に賑わいを取り戻そうと講師を呼び、上石津地区の良さを再認識して外からの訪問客や定住者が増加するまちづくりの目標を確認する。2007年には農業者と非農業者集団で構成する、農業集落の機能の再編と地域の活性化を目指す、地域保全グループ「いのち育む時（とき）の郷」を設立した。農村集落の存続のために地域で支えあう仕組みを定着させようとしている。

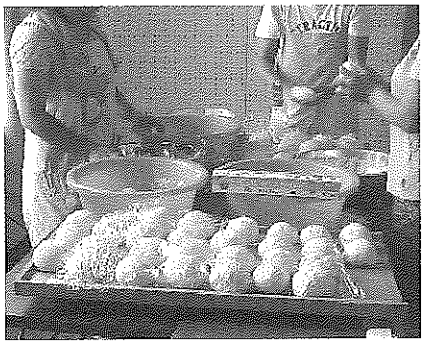
課題としては、時地区以外への運動の波及の必要があげられる。少子高齢化は農山村集落を直撃している。定着している人々の交流だけではなく外からの人々との交流も視野に入れて交流人口を増やしたいというリーダーをはじめとする会員の意欲が旺盛である。そのため、活動範囲が今後、拡大していく可能性がある。それが時地区だけではなく、上石津全体の共通認識になれば協力者も増えて他地域との連携が組めるが、従来の枠組みにとらわれているような気がするという声もある。

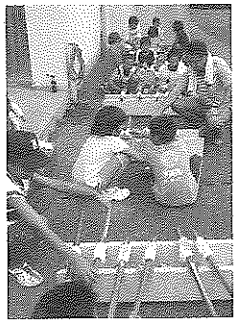
第2の課題は、マンパワー不足である。地域住民の意欲も高まり事業が増え、やりたいことが山積みである。しかし、まだ働いている壮年層が多いので土日しか活動できない。高齢者が理解を示してくれるので活動はしやすいが、動ける人がまだまだ欲しい。

第3章　子どもの学び場としての農山村体験交流事業の可能性

3-1　可能性

可能性は大きい。ただし、どんなに地域資源に恵まれていても実施する人々の熱意と合意形





成にかかっている。誰が言い出し、誰が引っ張ってくれるのか。リーダーが求められている。どの地区の関係者からも、資源の豊富さを聴いた。

「上石津緑の村公園施設」にはスポーツ施設や木工教室や陶芸教室などの体験教室、宿泊施設も揃っていることからここをもっと有効利用して、それぞれの地域資源と結びついた企画を組めば可能性が高まると言うことであった。「時夢工房」は設立以来、地区内はもちろん、大垣市からも子ども対象の日帰り体験事業を企画した経験から地区の活性化のために体験型交流プログラムを採用したい。他地区からも、資源は十分揃っているので、できれば上石津全体で協議会などの団体を立ち上げ、地域全体で交流をはかり事業を盛り上げたいと言う意見が多かった。

3－2　優れている点

豊かな自然環境に恵まれた上石津地区には子どが体験をしながら学べる活動が多い。

シイタケ栽培、里山保全、米作り、魚釣り、山歩き、蚕の繭引き、星空観察、ホタル鑑賞、緑の村、湖、音楽堂など自然豊かな環境には、都会では見られない自然の遊びや暮らしがあふれている。子どもを対象に周りの大人が協力して、周りの自然環境を生かした中で人間関係を豊かにし、地域の特性に気づかせようとする取り組みが多い。また意図も明確である。大垣市となってもこの付近は大垣市の里山地域として観光事業の対象地区でもある。この特徴ある資源があることと、それに気がつく人々がいる地域であることが、都市部や他の山村地域とは異なる存在感を持つのではなかろうか。

3－3　課題の評価

教育的配慮――「牧田のあそび塾」の「マスつかみ」は魚を取るだけではなく、魚の通り道で草を取ることや魚を放す場所作りなど、川という自然の中の教育活動と捉えられている。

大人と子どもが集う場――「牧田のあそび塾」や「夢工房」のハイキング道の整備や「紙芝居」活動、「マスつかみ」など、子供も加えて大人と一緒になって活動する姿勢から、身近なおじさん・おばさんへの信頼を育てる機会にもなる。人々の絆を深め合える機会を提供して参加者には好評である。どの地区からも、「上石津全体としての合同会議のような集まりが欲しい」と言う声があった。

話し合える場の確保――「地区によって温度差がある」と言う声も聞かれるが、それだけ地域によってこの事業への関心も違う。どの地域でも「自分の地域か大垣市内の子ども」までは受け入れ可能であるが、大挙して受け入れなければならないような時が来たらどうしようと言う。率直に意見交換が出来る場が必要ではないかと思う。

3－4　経済効果

収益が出る自立的活動――地域の取り組みの中で、生産活動を行っている団体は、販売による収益をあげて手ごたえを得ている。

一之瀬地区の「リアリティ花の里」グループの人々の出品は、花や野菜や特産品である。子どもの学びの場としての「農山村交流事業」が経済性を持つためには、何らかの収益が出る仕組みが必要だ。

マンパワー・担い手の問題――多くの労力をボランティアに依存する現状が他地区にでも聞かれる。農山村交流事業を受け入れた場合、これまで以上の時間と労力を提供しなければならなくなることに対して、地域の特性があり一様ではない。

受け入れ家庭と協力者次第では、多くの子どもたちを受け入れられる地域と、そうでない地域が出てくる。その時の経済的な保障を考えなくてもいいだろうか。

3－5　社会効果

主催者が活動を継続できるのは、参加者の喜びの声だと言う。「楽しかった、また今度も来たい」という声が、次の活動の意欲につながる。

参加者から寄せられた感想文がそれを物語っている。田んぼや畑や森林を知らない子どもたちが増えている。学校でも家庭でも学べない体

験にどういう価値があるのか、それを見つけて子どもを導くことが出来る大人が必要である。

その意味で、主催者が発するメッセージには大きな意味がある。情報発信の大切さを考えれば社会効果を期待することが出来る。

情報を広くたくさん発信している団体には反応も大きい。世間も注目する。

3－6　地域の他産業や人々の意識

農業や林業など第一次産業従事者が激減している時代に、子どもたちにかつての里山の暮らしを知らせることは大変難しい。

道路が整備され、情報も簡単に入る時代にあっては親元に同居して、子どもを預けて市内に通勤する若い人もいる一方、教育を考えたら人口の多い市内に引っ越そうという若い親もいる。

しかし、実家との距離は近くいつでも実家に遊びにこれる。その距離感から合併してから大垣市をいっそう身近な自治体と考える向きも出ている。

高齢な人ほど、合併による地域の特性が失われるのを憂えている人が多い反面、若い人の中には活発な地域づくりへと情熱を傾ける人と、大垣市民としてたまたま上石津地区に住んでいるだけで地域の存続の危機感の薄い人もある。

しかし、産業構造が変化している今、森林面積が8割もある地域の中で、地域の問題を無視していいのかということになる。そうした問題意識のある人々によって、衰退していく農林業の現代的復活という課題の解決も含めて、農山村交流事業へ向けた期待も大きい。

3－7　実施体制の状況

地区に応じた活動――外に向けて積極的な活動を展開しているところもあれば、地域の中の活性化に重点を置いた活動をしている団体もあり、上石津地区の多様性を反映している。

住民が切り開く地域活動――大垣市となり予算もこれまでと同じと言うわけにはいかないが、住民が活発に地域づくりをすれば行政が支援することは可能であるということだ。

学校との協力体制――地元の団体が活動するときには校庭や体育館を快く貸し出すなど協力的である。

3－8　実施に向けた提言

上石津地区全体会議の提案――上石津地区の活動団体が行政主導ではなく、一同に会して話し合える場が必要ではないか。

経験談を聞く――農山村交流事業を経験している他地区の主催者(高山市・白川村などから)を呼んで経験談を聞くなどの勉強会が必要である。

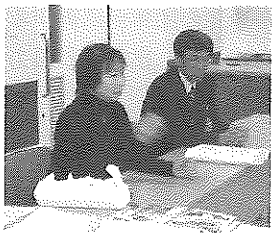
マンパワーの不足解消――全国にインターネットで協力者を募るなどして地域づくりに他人の参加をできるだけ広げることも検討すべき点である。

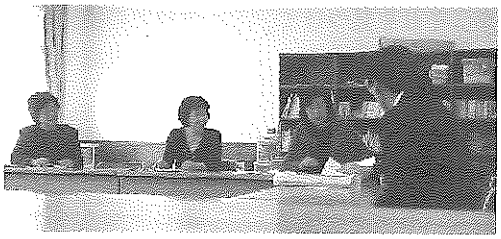
この事業に対する情報発信と理解の拡大――この事業を推進するためには多くの理解者・協力者が必要となる。学校関係者・農協関係者・行政関係者・商工会関係者・老人会・町内会(自治会)の協力が不可欠。また、事務局はどこになるのかなど窓口の明確化も重要な課題である。

おわりに

少子高齢化に伴う地域の人口構造の変化は、西濃地方の農山村部においては早くから過疎化に現れた。地域特有の自然や産物やそれを伝える人々の存在は地域の宝物、資源そのものである。上石津地区には自然がそのまま多く残っており、その存在と価値に気づき、それを生かそうと取り組んでいる人々がたくさんいる。

地域が持つ特有の資源に着目して、これを地域の子どもたちに伝えることで地域の存在を確かなものとすることは大人の責任と考えるところに、上石津地区のエネルギッシュな活動の特徴があると思う。また昔からの集落共同体の中で人々が助け合って自然と共に暮らしてきた長い歴史が、郷土への深い愛情を育んできた。荒廃する森林の再生は、全国の森林の共通の課題でもある。広葉樹の多い恵まれた森林を持つ上石津地域が、その特色を生かしたふるさとづく


牧田事務所


上石津地域事務所

一之瀬事務所

りから生みだすものは、そこに暮らす人々だけではなく訪れるほかの人にもわけ与えることが出来るものであるといえる。それは訪れた人が享受できる恵みのようなものでもある。温かい人柄、優しい景観、手塩にかけた特産物など都会が失ったものがこの地には山のように残されている。それらを含めて地域資源の宝庫である上石津地区が大垣市の人々のふるさととなり、また訪れる人にも懐かしさと温かさを与えることが出来るような特別の地となる気がする。観光化しない手付かずの風景が残されているのも魅力である。

魅力を理解し、地域とともにさらなる魅力づくりと自分らしさを追求する人々が増えれば、この地区への定住者を呼び込むことができないだろうか。

或いは、人口がこれ以上、増えなくてもいいと思っている人もあるかもしれない。

そうした人々の思いをみんなで率直に話し合える環境を整えつつ、上石津地区が大垣市の中では特別の意味を持つ地域であることを願う。

たびたびの訪問に際してお忙しい中をインタビューにお答えいただきまして誠にありがとうございました。関係者の皆様方にはご協力ありがとうございました。

・上石津町「町政要覧」
・「ふるさと学校ミニコラム」2006年８月
・上石津町時地区「まちづくり活動の歩み」2006年２月
・「牧田あそび塾の取り組み」2007年12月
・岐阜経済大学まちなか共同研究室マイスター倶楽部編「地域資源を活用した『子どもの学び場の創出』と観光資源化に関する調査研究」2007年３月
・時地区「平成19年度『いのち育む時の郷』総会資料」2007年４月

調査協力者

９／21　田中孝典氏（大垣市市会議員）
　　阿藤昭博氏（時☆夢工房代表）
　　池井元氏（大垣市一之瀬所長）
　　三輪幸治氏（大垣市役所上石津地域事務所）

９／23　坂口智之氏（時まちづくり活動推進実行委員会　時夢工房　事務局）他

11／１　中山庄三氏（大垣市牧田支所長）
　　芳田眞理井氏（牧田あそび塾　牧田公民館館長）

11／２　三輪健二氏（大垣市役所上石津地域事務所）
　　三輪幸治氏（大垣市地域事務所地域政策課　庶務係長兼多良地区担当係）（午前）
　　三輪隆昭氏（多良公民館長）
　　池井元氏（大垣市役所一之瀬市所長）（午後）